

亡き
ジョセフ・ウエーバー
と
アラン・ホッフマン
に
捧ぐ

目次

- 序章
貧窮—後アナキズム
生態学と革命思想
解放的工業技術に向けて
自由の形態
マルクス主義者よ、聞け！
親和グループについてのノート
『マルクス主義者よ、聞け！』についての議論
フランスにおける五月—六月の出来事
フランス—生活のための斗い
ある手紙の抜萃
欲望と必要

目次

序章の意義 1
第一章 社会の起源 1
第二章 社会の発展 1
第三章 社会の崩壊 1
第四章 社会の再建 1
第五章 社会の未来 1

凡例

- 一、本書は Murray Bookchin, Post Scarcity Anarchism の全訳である。
- 一、原文中のイタリック体は訳文では傍点を付した。但し、「マルクス主義者よ、聞け！」についての議論の章のイタリック体（質問の部分）は「」で示した。またイタリック体が書物名を表わしているときは、『』で示した。
- 一、原注はすべて（注）を付し、原文通り割注とした。
- 一、原書巻末の引用文献は本文の中にそのつど『』で示した。

序章

我々は普通現在に深く埋没して生きている。実際それは、我々の生きている社会の時代が過去―たった一世代前でさえも―と比べて幾程変化しているかを、時として理解できない程である。現代人のこの時代への隷属状態は我々の全く気づかぬ間に進行しもある。それは知らず知らずの内に、伝統の極端に反動的な観点―時代遅れの価値観やイデオロギー、組織の位階制、政治的行為の一方的な様式等―に縛りつける。もし現代の生活での我々の根底が豊かな展望によって拡張されるのであれば、それは世界の持つ未来への豊かな潜在力については勿論、現実の世界そのものの認識をも容易に歪曲してしまう。

世界は大きく変様しつつある。それは多くの人々の理解以上に深刻である。極く最近まで、人間の社会は避け難い物質的窮乏によって押し出された野蛮な事象と節制、断念が罪等におけるその事象の主観的写しの周囲に形成されてきた。過去の有機的^(注)社会を破壊する偉大な歴史的精神、人間を自然から分ち、人間を「人間」から分つ

もの、それらは生存の問題、つまり人間存在の単なる維持に含まれる問題に起源を持った。物質的窮乏は家長制家族、私有制、階級支配、国家等の発展のために歴史的理論根拠を与えた。それは都市を農村に、精神を感覚に、労働を遊戯に、個人を社会に、ついには個人を己自身に対立させる深刻な分裂を位階制社会内につくった。

(注) 「有機的社会(オーガニック・ソサイエティ)」によって私は、その共同体が血族関係の絆で結合され、生活の手段に関して共通の利益で結合された組織の形態を意味している。有機的社会は、位階制社会に見られるごとき搾取に基づく階級や官僚に未だ分たれていない。

この長い歪んだ発展が一つの違った道、もっと温和な道をたどることができたかどうかは、今は関知しない。発展は我々の背後に巨大として存在する。多分、一度噛めば完全に喰いつくさねばならぬ

かつた神話のリンゴのように、位階制社会は悪魔的の制度を払い清められる迄は、己自身の血の行進を完成せねばならなかつた。たとえそれがどうあろうとも、歴史のドラマにおける我々の位置は、過去のいかなるものとも根底的に違つてゐる。二〇世紀の我々は文字通り人間歴史の後継者であり、単調な骨折り仕事や物質的不安定から解放されようとした人間の年古い努力の遺産受取人である。長く継続した世紀の中で初めて今世紀—この一世紀だけ—は人類を揚めて工業技術的發展の全く新しい水準に達せしめ、人間経験の全く新しいヴィジョンに達せしめた。

今世紀の我々には、すべての人々が享樂できる物質的豊富さの展望—退屈な日々の労苦の必要がなくても生活の手段に十分である—はついに切り開かれてゐる。我々は一世代前に総体的には知られていなかった人間と工業のための資源を発見してゐる。我々は機械を自動的につくる機械を創案してゐる。骨折りな仕事を最も強力な人間の筋肉よりもずっと効果的に仕上げられるし、最も器用な人間の工業的技能を超えているし、最も有能な人間の頭脳よりもずっと速く且つ正確に計算できる装置を我々は完成させてゐる。この質的に新しい技術に支持されて、我々は人間性の貴重な時間を消費したり、心のこもらない労働に何にも代え難い創造的エネルギーの貯を消費したりすることなく、食・住・衣、及び広範囲の快樂を供給し始めることができる。要するに、我々は歴史上初めて貧窮—後社会の門口に立っているのである。「門口」という語は、現存の社会が工業技術の貧窮—後の潜在力を全然実現させてこなかつた、というこのために、ここで強調されねばならない。現代資本主義が中間階級に提供する如く見える物質的恩恵も、現代の資本主義による

いかなる階級にも増して卑しい位置に彼等を貶す傾向をもつ。この資本主義システムはプーチーブルを自己抑制をもつた共犯者に仕立てるために、豊富さの力を拡張する—最初に彼を商品に、市場で売るための物に転換することによって、次に彼の欲望を商品の網目状関係の中に同化する事によつて。ブルジョア社会のいかなる転変にも暴虐にさらされるので、プーチーブルの全個性は不安で戦っている。彼の催眠薬—商品、より多量の商品—はまさに毒薬である。この意味で今日「特権」よりも抑圧的なものはない。なぜなら「特権を与えられた」人間の精神の深奥は搾取と支配のための恰好の獲物である。

しかし弁証法的イロニーのこの上ないひと練りによれば、この毒はまた毒自身の解毒剤である。豊富さのための資本主義の能力—資本主義が支配のために用いる催眠剤—は資本主義の犠牲者達の夢の世界に不思議なイメージを喚起する。支配の悪夢を駆け通れば自由のヴィジョンであり、もし豊富さが人間的目的に用いられたならば、存在は違つたものになるだろうという抑圧的直観である。豊富さが無意識に侵入して無意識を操るのとちょうど同様に、無意識は豊富さに侵入して豊富さを解放する。今日、資本主義の主要な矛盾は、現に存る状態と将来に存り得る状態との—支配の現実と自由の潜在との—間の軋轢である。ブルジョア社会の破壊のための種子は、ブルジョア社会が自己維持のために用いるまさにその手段に存する。つまり歴史上初めて自由の物質的基礎を提供する能力のある豊富の工業技術である。このシステムは、ある意味では、自己破壊に自己が共犯している、つまり自己揚棄的である。それはヘーゲルが他の文脈で次のように述べてゐる。「苦心努力は遅すぎる。且とられた

資源の贅沢な浪費も伴に合理的、人間的且真に疎外されていない貧窮—後社会の内容の反映ではない。「貧窮—後」という語を多量の社会的に有用な品物を意味してゐる、と単純に看すことは、生物を多量の化学物質として単純に考えることと同様愚かなことである。一点挙げれば、貧窮とは乏しい富の状態以上のことである。もしその言語が人間関係において何かを意味し得るとすれば、それは精神的不安定を養う社会関係と文化装置を包含するものでなければならぬ。有機的社会ではこの不安定は不確かで危険な自然世界によつて確立された抑制的制限の機能で有り得たかもしれない。位階制社会ではそれは搾取的階級構造によつて確立された抑圧的制限の機能である。さらに、「貧窮—後」という言語は生活の手段の単なる豊富さということ以上のものを基本的に意味してゐる。それはこれらの手段が支持する生活の種類を明白に意味してゐる。「貧窮—後」社会における人間関係と個人の精神は、この豊富さが可能とする自由と安定と自己表現を十分に反映するに違ひない。要するに、貧窮—後社会は現代の豊富の工業技術に隠れている社会的、文化的潜在力の全面開花である。

(注) それ故トム・ハイデンの近著「試行」における「貧窮—後」の表現法は馬鹿げたものである。青年の文化は「貧窮—後快樂主義」に陥り、社会的には受動的になるかも知れないという處は、彼が「貧窮—後」の意味と青年の文化の性質を未だ完全には理解していないことを明らかにしてゐる。

資本主義は、中間階級に「特権」を与えるどころか、社会の他の

手段はすべて病気を一層悪化させる……。」(「精神現象学」) もしブルジョア社会を維持する苦心努力が自己腐敗的になる傾向があるならば、行なわれる苦心努力はそれだけ激しくブルジョア社会を破壊することになる。今日、資本主義の最大の強さは支配のイデオロギーによつて革命の目標を覆えず能力にある。この強さの理由を明らかにするものは、「ブルジョア・イデオロギー」は単にブルジョア的なのではないという事実である。資本主義は歴史の相続人であり、過去の位階制社会のあらゆる抑圧的特徴の遺産受取人である。ブルジョア・イデオロギーは、社会支配と社会の存続要件の最古の要素—この要素はあまりにも古く、あまりにも制し難く、あまりにも疑いをさしはさむ余地がないように見えるため、人々はしばしばこの要素を「人間性」と間違える程である—で継ぎ合せられてきた。この文化遺産の力については、社会主義者の計画自身が位階制、セックシズム、棄権等によつて浸透されている程度以上には何も語るべき注釈はない。これらの要素からブルジョア世界の—且いわゆる「ラジカルな運動」の—毎日の関係を触媒するあらゆる社会的酵素が出てくる。

位階制、セックシズム、棄権は「民主的中央集権主義」、「革命的指導」、「労働者国家」、「計画経済」等によつては消滅しない。もし集権主義が「民主的」であるとして現われるならば、もし指導者が「革命的」であるとして現われるならば、もし国家が「労働者」に属するものであるとして現われるならば、もし財貨生産が「計画」されたものとして現われるならば、逆に、位階制、セックシズム、棄権はなお一層効果的に機能する。社会主義者の計画がこれらの要素のまさに存在に気づかない、ましてや彼等の誤った役割に気づく

はずがないその限りは、「革命」自体が反革命の面となる。マルクスのヴィジョンにもかかわらず、この種の「革命」の後に「死滅」する傾向のあるものは、国家ではなくてまさに支配の意識である。

実際、社会主義の理論で「計画経済」として通用している多くのことはすでに資本主義によって達成されてきた。それ故、国家資本主義は、広範囲のマルクスの教義を御用イデオロギーとして同化する能力がある。さらに、先進資本主義国では、まさに工業技術の発展は「社会主義の国家」の存在のための最大に必要な理由の一つを除き去っている。つまり、マルクスとエンゲルスの用語で述べれば、「総生産力を可能な限り急速に増大する」必要である。（「共産党宣言」）「計画経済」や「社会主義国家」の問題——資本主義の初期の段階によって、また工業技術の発展の低い段階によって創られた問題——の周囲でこれ以上長くもた／＼することは、セクト主義者のクレチン病となるだろう。革命プロジェクトは我々の時代の巨大な社会的可能性とよく釣り合うようにならねばならない。なぜなら、自由の物質的前提条件は過去の最も寛容な夢をこえて拡がっているのと同様に、自由のヴィジョンもまたそうである。我々は貧窮——後社会の門口に立っているのであるから、社会的矛盾は何が廃止されねばならないか、そして何が創造されねばならないかの両方に関して成熟し始めている。我々はブルジョア社会の社会関係のみならず、幾千年の位階制社会によってつくられた支配の遺産にもまた終末をもたらさねばならない。我々がブルジョア社会に代えるべく創り出さねばならないものは、社会主義によってヴィジョン化された無階級社会のみならず、アナキズムによってヴィジョン化された無抑圧のユートピアでもある。

していることは、ユートピア自身が達成されるまでこれらの「期待」は「揚まり」続けるだろうということである。このことには十分な理由がある。「期待」を「揚まり」に——実際は、得られた個々の「権利」で段階的揚まりに——つき上げるものは、資本主義システム自身の全くの不合理である。サイバネ機械、オートマチック機械が骨折し仕事を減少させ、近い将来消滅させるといふとき、青年には一生涯の骨折し仕事より意味のないものは何もない。現代工業がすべての人々に豊富さを提供できるといふとき、貧しい人々には一生涯の貧困よりも邪悪なことは何もない。すべての富が社会的平等を推進するために存在するというならば、民族的少数者、女性、ホモには服従よりも犯罪的なものは何もない。これらの対照は無限に拡げようと思えばできるし、また我々の時代の社会的苦悶をつくり出したきたすべての問題をおおっている。

貧窮——後、レジャー、豊富さ、自由に対し貧窮、骨折し仕事、貧乏、服従を支持しようとするために、資本主義は歴史上最も不合理な、実際最も人工的な社会として膨張して現われている。社会は今や總体的に異国的（疎外的）は勿論、強力の様相を呈している。それは言わば、人間性の最深部の欲望や衝動の「他者」として現われている。社会に関するあらゆる事——最も「魅惑的な」快樂を含む——が總体的に正気の沙汰でなく、多量の社会的精神異状の結果と見える一点が到達される迄、いや増す規模で潜在力は現実に対する人々の毎日の観点を決定し、形づくり始める。

驚くまでもなく、社会の合成的食事に比べて自然食を、一夫一婦制家族に比べて拡張した家族を、性的抑圧に比べて性的自由を、人間の原子化に比べて種族生活を、都会風に比べて共同体を、競争に

今日迄のところ、我々はブルジョア社会の工業技術の能力、貧窮——後社会を支えるその潜在力、そしてこれのつくり出すところの存在するものと存在し得るものとの間の緊張によって主に心を領有されてきた。この緊張は莫然とした仕方で理論的抽象の間を浮遊しているなどと誤った注目をすべきでない。緊張は現実であり、それは日々何百万もの生活に表われている。しば／＼直観的に、人々はたった十年かそこいらの昔受動的に受け入れた社会的、経済的、文化的条件を忍び難いと思ひ始める。黒人解放運動の過去十年を超えた成長（黒人のあらゆる感性を彼等の被抑圧に覚醒することへ揚めた運動）は、この展開の爆発的な証拠である。黒人解放は女性解放・青年解放、子供解放、ゲイ解放等と連帯しつつある。すべての民族グループ、事実上すべての宣言はたった一世代前には受け入れ難いと思われていた沸騰状態にある、昨日の「特権」は学生、一般の若者、女性、民族的少数者達の間で、また早晩、システムがその支持のために伝統的にあてにされてきたまさにその社会階層の間で、目まいせんばかりに連続して今日の「権利」となりつつある。「権利」のまさにその概念は、下層階級に「権利」を授け、「特権」を否定する恩きせ顔のエリートの表現として怪しくなりつつある。かようなエリート主義と位階制に対する戦いは、主要目標としての「権利」のための戦いに取って代りつつある。要求されつつあるものは、もはや正義ではなく、むしろ自由である。虐待に対する道徳的感受性——過去の基準によれば最も小さな虐待でさえも——はたった二、三年前には受け入れ難いと思われていた鋭敏さに到達しつつある。

現実性と潜在性との間の緊張のためのリベラルな婉曲語法は「揚まりつつある期待」である。この社会学的成句が説明することに失敗比べて相互扶助を、所有に比べて共産主義を、そして最後に位階制と国家に対してアナキズムを強調する培養体（「新組織体」）が増加し始めている。ブルジョアの批評によって生活することを拒否するまさにその行為において、ユートピアンの生活スタイルの最初の種子が蒔かれている。否認は是認に移り変わる。現代の拒絶は資本主義自身の腐敗する腸の内部で未来の擁護となる。「ドロップ・アウト」は仮の、実験的な、そして今のところ極めて不明確なユートピアの社会関係へのドロップ・インの一種式となる。完成したものとして取り挙げれば、この生活様式はユートピアではない。実際、それは恐ろしく不完全なものであるかも知れない。しかし手段として取り挙げれば、この生活様式とそれへ導くプロセスは革命家を改造し、もし革命が完全であらねばならないとするならば、いかに多くの事が変えられねばならないかということに、革命家の感覚を自覚めさせる上で絶対不可欠である。その生活様式は革命家の本来の姿を保持する上で、ブルジョアの価値による革命プロジェクトの転覆に抵抗する心理的源泉を革命家に提供する上で、不可欠である。

現実性と潜在性との間の緊張、現代と未来の間の緊張は我々の時代の生體的危機において黙示的均衡を得ている。この本の大部分は環境の問題を取り扱うだろうけれども、二、三の広い結論はここで強調されるべきである。環境の危機をブルジョア機構内部で解決するいかなる試みも、空想的として放棄されねばならない。資本主義は先天的に反生體的である。競争と蓄積は生活の法則、つまりマルクスが「生産のための生産」の句に要約した法則を打ち建てる。いかなるものも、神聖とされていようが、珍奇であろうが、「その価格を持ち」、市場のための正当な獲物である。この種の社会では、自

然に取奪され、搾取されるべき単なる資源として必然的に取り扱われる。自然界の破壊は単なる傲慢な大失敗の結果であるところか、資本主義的生産のまさにその論理から出てくることは動かし難い。

工業技術へ傾く大衆の精神分裂症の態度―恐れを希望で調合する態度―は軽率に放逐されるべきではない。この態度は基本的、直観的真理を表現している。つまり、人間の必要の満足の周囲に組織された社会で、人間を解放することができるその同じ工業技術が、「生産のための生産」の周囲に組織された社会で、不可避的に人間を破壊するにちがいない。いかにも、工業技術に負せられたマニ教的二元論は、それだけでは工業技術の特徴ではない。現代工業技術の創造し、あるいは破壊する力は単に一般的社会弁証法の二面―位階制社会の否定面と肯定面―である。もし位階制社会が自然を「支配」するために、「歴史的に必要」である、というマルクスの主張に何か真理があるならば、我々は、自然を「支配する」という概念が人間による人間の支配から出現した、ということを決して忘れてはならない。人間と自然は伴にいつも位階制社会の共通の犠牲者になっている。両者が今や生態的絶滅に直面している、ということとは、生産手段が強力になりすぎたため、終に、支配の手段として管理され得なくなっている、ということの証拠である。

我々が位階制社会の発展の終末に立っている今日、その否定面と肯定面はもはや和解せられるべくもない。それら否定面と肯定面は相互に非相解的に対立しているのみならず、相互に排他的全体として対立している。位階制社会のあらゆる制度と価値は、その「歴史的に必要な」機能を使い果たしてしまっている。所有と階級、一夫一婦制と家父長制、位階制と權威、官僚制と国家等のための社会的

(注) それ故、ここに女性解放運動の革命的核がある。それは支配のまさにシタクス(II)文法上の統語法―ここでは制度―と筋肉組織(権力装置のこと)を衆目環視のものとした。そうすることで、運動は「社会」、「階級」、「プロレタリアート」のようなただの抽象ではなく、日々の生活それ自身を疑問の中に投じた。ここで私は「人間」、「人類」、「人間性」、そして男性(文法学用語)のような術語をこの本で用いたことを弁明しなければならぬ。「人民」や「個人」の代用語がないので、私の用語法はきこちなくなくなっているだろう。我々の言語もまた解放されねばならない。

このユートピアを「アナキズム」として記述するに際して、私はまた等価の表現―「無政府共産主義」を用いたかも知れない。両術語は、所有社会によって創られた裂け目が新しい疎外されていない人間関係によって超えられる、無国家の、無階級の、地方分権の社会を表示している。アナキズムあるいはアナルココミュニズムの社会は、私有財産の廃止、個人の必要に従った財貨の分配、商品関係の完全な崩壊、仕事の交代、労働に専念する時間の決定的な減少を前提とする。しかしこの程度の記述の状態では、我々は自由社会の解剖学を持っているに過ぎない。記述は自由―共産化へのプロセスとしての自由―の生理学の説明を欠いている。記述は事実上、社会の改造を心の改造に連鎖させる主観的次元を欠いている。

アナキストは他のいかなる革命運動よりも、より多くの注意を革命の主観的問題に多分与えてきた。広い歴史的視野からすると、アナキズムは、多くの異なった名称の下で、支配と權威に反逆する人間の性の始源の闘いに帰着する人々の欲望に満ちた大浪、社会的無意識

理論根拠はもはや何もない。これらの制度と価値は、また市、学校、基本的人権の助等と伴に、それらの歴史的限界に到達している。マルクスとは対照的に、我々は、位階制社会の制度と価値は常に、「歴史的必要悪」であるというバクーニンの観点には少ししか論難を加えないだろう。もし今日バクーニンの裁断が、マルクスのそれよりも道徳的優越性を持っているとく見えるならば、これは、諸制度が終にその道徳的權威を喪失しているからである。

(注) それ故、ここに社会主義者のプロジェクトの反動的観点がある。これは革命後の人間の未来の部分として位階制、權威、国家の概念をなおも維持している。伴立(II)一つの命題から他が論理的に帰結されること)によって、このプロジェクトはまた、所有(「国有化された」と階級(「プロレタリア独裁」)の概念を維持する。種々の「正統」マルキスト(毛主義者、トロツキスト、スターリニスト、そしてこれら三者のすべての傾向を組合わせた雑種セクト)は總体的社会発展の否定面と肯定面をイデオロギー的に調停する―正確には彼等が決してより非相解的、客観的になっていない時には。

これで見れば、来るべき革命とそれが創り出すユートピアは全体として思案されねばならない。それらは支配によって汚されてきた生活のいかなる領域も不可触のまま残すことはできない。革命からは過去の全裂け目を超越する社会が出現しなければならぬ。実際、多方面の、万遍ない、總体的な経験の悦楽をすべての個人に捧げるもの(革命とそれがつくるユートピア)が出現しなければならぬ。

の奮起である。教条的スローガンへの束縛は最小限である。日々の生活が表出するものへの実際の関心において、アナキズムは常に生活様式、性、共同体、女性解放、人間関係に没頭してきた。その中心の焦点は、常に、社会革命が得ることのできる唯一の意義深い目標である―人類が自己完成し、人間生活が崇められ、真にすばらしい経験となる、そのような世界の改造である。ほとんどのラジカルなイデオロギーにとっては、この目標は皮相的である。往々これらのイデオロギーは人々に抽象を強調することによって、人類を手段―皮肉にも「人民」や「自由」の名の基に―に墮落せしめてきた。

社会主義者とアナキストの相違は、衝突する理論のみならず、衝突する組織化と実践の型に現われている。私は、社会主義者が組織化して位階制組織をつくる、ということに注目してきた。対照的に、アナキストは組織的機構を「親和グループ」―社会的目標と同じ位人間関係に関心を寄せている親友の集まり―の上に基礎づける。アナキストの組織のまさにその様式は心と社会的世界の伝統的裂け目を超える。もし必要が起るならば、諸親和グループが調整して相当大きな運動体(例えばスペインのアナキストはこの幾千もの核形態の国家的規模での連合をつくった。)になることを妨げるものは何もない。しかしその運動体は、大きな組織へのコントロールが調整機関よりもむしろ諸親和グループに存在する、という優れた点を持っている。次に、あらゆる活動は強制と命令ではなく、自発主義と自己規律に基づいている。このような組織においては、実践は社会的活舞台においては勿論、個人的活舞台においてもまた解放的である。グループのまさにその性質は革命家を勇気づけ、彼を

革命化する。

実践へのこの解放的アプローチはなお更に「直接行動」^{ダイレクトアクション}というアナキストの概念に持ち込まれている。一般的に言えば、直接行動は戦略として、国家機構や政治技術に頼ることなく国家を廃止する方法として考えられている。上記の解釈はその限りでは正しいけれども、ほとんどそれ以上には十分進めない。直接行動は一つの基本的革命戦術、「大衆」の個別化を推進しようと企図する実践の一つの様式である。その機能は一般の構成内部で特殊の同一性を主張することである。その政治的含意よりも、その心理的効果の方がより重大である。なぜなら、直接行動は人々を彼等自身の運命に影響できる個人として彼等自身を覚醒させるからである。

(注) 私はここで「人民への(に属する)力」なるスローガンが実行されるのは、社会的エリートによって發揮される力が人々の中に溶解される時のみである、ということをつけ加えねばならない。各個人はその時日々の生活をコントロールすることができ、もし「人民への(に属する)力」が人民の「指導者」への力以上の何ものも意味しないならば、その時人々は未分化の、操作可能な大衆にとどまり、革命前と同様に革命後も依然として無力にとどまる。最終分解において、人民が一なる「人」として消失するまでは、人々は決して力を持ち得ない。

最後に、アナキストの実践はまた自発性—外的な操作されたプロセスではなく、内的なプロセスとしての実践の概念—を強調する。その批判者達にもかかわらず、この概念は単なる未分化の「衝動」

善する人間の能力に依存している。革命が新しい生態工業技術と生態共同体を伴った生態的社会を創るか、さもなければ我々が今日知る如き人類と自然界は滅びるか、のどちらかだろう。

あらゆる革命的画期は、明らかに分離していた諸プロセスが集合して社会的に爆発的危機を形成する一点集中の時期である。もし我々自身の革命的画期がしばしば先行のそれよりもより複雑に見えるならば、これは、集合する諸プロセスが過去にかつてそうであったよりもより普遍的であるからである。我々の出发点は頼るべき励みになるいかなる歴史的先例も持っていない。先行の革命的画期はすくなくとも慣れ親んだ制度的カテゴリーにかかわるものであった。家族、宗教、所有、苦しい労働、国家等は、たとえそれらの形態が変革すべく挑戦されたとしても、当然視されていた。位階制社会はこれらのカテゴリーを使い尽してはいなかった。より堂々と威厳のある、より包括的な社会関係へのその発展はなおまだ実現されなかった。

(注) この事情はその時以後起ったロシア革命、あるいは「社会主義」諸革命でも変らない。制度的カテゴリーは消失してしまつてはいない。せいぜいで名称が変化しただけだ。

我々の時代では、しかしながら、この発展は飽和点に達している。位階制社会が主張する未来は何もない、そして我々にとつてはユーロピアが社会の死滅かの二者択一のみがある。世界との我々の疎隔が苦悶点に達している、それ程我々は過去の破壊物の破片を荷負つ

を物神化するものではない。生活それ自身と同じく、自発性は多くの異った水準で存在する。それは多かれ少なかれ知識、洞察力、経験によつて浸透され得る。或自由社会では、三才児の自発性は三〇才の人のそれと同じ種類のものではめつたに有り得ない。両者は束縛なく自由に發展するだろうが、三〇才の人の行動はより明確な、より知識のある自己の上に基礎づけられているだろう。それで思えば、自発性は一つの親和グループ内でのほうが他のその内部でもりもより多く鼓吹されるし、知識や経験によつてより熟させられるかも知れない。

しかし自発性は、直接行動が単なる組織化の戦略でないのと同様に組織化の「政治技術」ではない。自発的活動における確信はなお一層大きな確信—自発的發展における確信—の部分である。あらゆる發展は自身の均衡を自由に発見しなければならぬ。自発性は渾沌の招来とはおよそ異つて、發展の内的力を解放して真正の秩序と安定を発見することを含んでいる。以下の章で見る如く、社会生活での自発性は生態的社会のための基礎を提供する自然における自発性と相伴つて一点集中する。有機的社会を形づくつた生態的諸原理はユーロピアを形づくる社会的諸原理の形で再出現する。しかしこれらの原理は歴史の物質的、文化的獲得物によつて今やよく知られている。自然生態学は社会生態学になる。ユーロピアにおいて、人は、無政府共産制が原始共産制に復帰するのではないのと同様に、人の祖先の自然との直接性(祖先の自然的存在)に復帰しない。今であれ、未来であれ、人間と自然との関係は常に科学、工業技術、知識によつて媒介されている。しかし科学、工業技術、知識が自然自身の利益になるように自然を改善するかどうかは、社会状態を改

てなんと重々しく悩んでいることか、また我々はなんと豊饒に未来の可能性を持つていることか。過去と未来は、潜在的像が二重露出によつて出現するように、相互に重なり合う。そこには慣れ親しんだものがある。しかし文字が跳く人間の手足の形をしているサイケデリックなボスターのように、それは捕え難く奇妙なものも混合している。位置を少し転換すれば、与えられた現実とは完全に逆になる。我々には、生活が生存の唯一の様式、遊戯が労働の唯一の様式、個性的なものが社会的なものの唯一の様式、性の役割/性別による任務の(違い)の廃止が性の唯一の様式、種族制が家族の唯一の様式、感性が合理性の唯一の様式と思われる。信じ難い逆転をする古いものと新しいもののこの織り合せは、既成秩序の普通の「二様に解釈できる曖昧な話」ではない。それは誕生している巨大な社会的変化を反映する客観的事実である。

あらゆる革命的画期は、さらに、明らかに分離した諸プロセスを集めるのみならず、社会的危機が最も鋭い時間と場所での特別の座にそれら諸プロセスを一点集中する。十七世紀では、この中心はイギリスであった。十八世紀と十九世紀はフランス、二十世紀の初期はロシアであった。二十世紀後期での社会的危機の中心はアメリカ—世界の人口の五パーセントならず世界の財貨の半分以上を生産する工業的巨象—である。ここに世界資本主義のローマ、帝国の弓形門の要石、仕事場と商品の市場、金融的魔術の穴、文化の神殿、兵器工場がある。ここにまた世界反革命の中心がある—そして世界歴史の体系としての位階制社会を打倒できる社会革命の中心がある。歴史的にも国際的にもアメリカの戦略的位置を無視するならば、現実性への信じ難い無感覚を表明することになるだろう。この戦略

的位置のあらゆる含蓄を引き出すことに失敗し、それ故、それらに基づいて行動することに失敗するならば、罪の大きさに無頓着になることだろう。賭金はあまりに大きく曖昧主義を許すことはできない。アメリカ—この強調されねばならない国—は世界で最前進した社会的地歩を占めている。他のいかなる国にもましてアメリカは歴史上最大な社会的危機をはらんでいる。位階制社会の廃止とユーロピアの建設に関係のあるあらゆる表出は、どこよりもここアメリカでより明白である。ここに、マルクスが人類の「前史」と呼んだところのものを廃棄し、超える富が横たわっている。ここに、革命的闘争の最前進した形態をつくり出す矛盾がまたある。アメリカの制度的構造の衰微は、何か神秘的な「神経の衰弱」や第三世界の帝国主義的冒険の結果ではなく、第一にアメリカの工業技術の潜在力の爛熟の結果である。種子が十分に成熟した垂れる果実のように、その構造は極く軽ろやかな一撃で落下する（崩壊する）かも知れない。その一撃は第三世界から、大きな経済的混乱から、早計な政治的抑圧からでさえ来るかも知れない。しかし構造は爛熟と衰微のために崩壊するにちがいない。

この大きさの危機では、位階制社会の核心的問題は、個人的であれ、社会的であれ、政治的であれ生態的であれ、道徳的であれ物質的であれ、生活のあらゆる面から把握され得る。あらゆる批判的行動と運動は家庭的、帝国的大建造物を侵食する。社会的矛盾の完全に異った舞台と時代から借りてきた党派の熱弁によってどんな不満の表明にも反駁することは、単に盲目になることである。論理的結論をつければ、黒人解放闘争は帝国主義に対する闘争である。平衡的環境のための闘争は、商品生産に対する闘争である。女性解放運動

とき、まさに逆転が起った。三〇年代の世代は社会の最も恐ろしく反動的な部分の一つになった。他方、六〇年代の若者は最もラジカルになった。

この外観上のパラドックスの内部で、貧窮と貧窮—後のための潜在力の間の矛盾は、完全な対決の形で現われる。その丸ごとの心が貧窮—三〇年代の不景気と不安定—によって形づくられた世代は、その心が貧窮—後社会のための潜在力によって影響を受けた他の世代に対決する。白人の中産階級の青年は誤った「特権」を拒絶するという特権を持っている。不安定に付きまとわれた両親と対照的に、青年は癒しはするが決して満足させはしない空虚な消費主義によって迷いを醒まされている。世代のギャップは現実である。それは今日アメリカを自身の社会歴史から、廃れつつある過去から増々分離する客観的ギャップの反映である。この過去は今のところはまだ葬らねばならないものとしてあるけれども、その墓掘り人であると十分に証明され得る世代が出現しつつある。

「ブルジョアの根っ子」の理由でこの世代を批判することは、自身の真剣な意見が大笑いをまき起しているのを知らない劣等生（人文主義者にとってのスコラ神学者の如き劣等生）の知恵を表明することだ。労働者であれ、青年であれ老人であれ、黒人であれ白人であれ、ブルジョア社会に生きていてはすべての者は「ブルジョアの根っ子」を持っている。人がいかにブルジョア的になるかは、人がブルジョア社会から何を受け取るかにもばらばらかかっている。もし青年が消費主義、労働倫理、位階制、權威等を拒絶するならば、彼等はプロレタリアートよりも「プロレタリア的」である—社会主義者の着古したイデオロギーの諸要素を、それ等がそこから出てき

は人間の自由の闘争である。実際、この極めて多量の不満の追求は、当分の間は、既成の制度的諸水路に転じられ得る。しかし唯当分の間だけである。社会的危機は、既成制度がそれを抑制するにはあまりにも深く且世界歴史的である。もし体制が黒人解放、「恋の世代」、六〇年代の学生運動を同化するのに失敗したならば、それは制度的柔軟性や富が無いからではなかった。アメリカの「左翼」のカサンドラ（「トロイのプリアムとヘクバの娘で予言者、決して信じられなく運命づけられていた。」のような予兆にもかかわらず、これらの運動は、既成制度が提供しなければならぬものを基本的に拒絶した。より正確には、各運動が相会するにしたがって、それらの要求は増大した。と同時に、運動の物質的基礎は拡張した。二、三の孤立した都市のセンターから放射状に拡がり、黒人、ヒッピー、学生のラジカリズムが国中にしみ出し、大学は勿論高校に、ゲットウは勿論郊外に、都市は勿論農村にも浸透した。

運動への新参加者がしばしば白人の中産階級の青年であるからといって、これらの運動の価値に異議を差しはさむことは、大事な点を避けてそれが当然なごとく論を進めるものである。多くの戦闘的ラジカルがかなり数多い階層から出てくる傾向がある、という事実ほどブルジョア社会の不安定さへの良い証拠は多分ない。五〇年代には、種々の型のカサンドラ—官僚社会はアメリカの青年を現諸制度に完べきに適合させるべく工作している、と警告した「オウエルの世代」—がいたことは都合よく忘れられている。その当時の予言に従えば、官僚社会はその主要な支持を後続世代の若者から奪はずであった。減少する三〇年代の世代はラジカルな、ヒューマンな価値の最後の貯蔵所となるだろう、と論じられてきた。議論が止った

た廢れゆく過去と伴に我々が葬ることを勇気づけるべきでしょう」とした語義的ナンセンス。

もしこのナンセンスが今日なおも何らかの注目を起させるならば、それはアメリカにおける革命プロジェクトの無気力な性格によるものである。アメリカの革命家はアメリカの問題に関係ある声を今はまだ発見しなければならぬ。第一世界の問題は第三世界の問題ではない。さらに、二つの世界は十九世紀の問題を取り扱うイデオロギーに退却することによって橋渡しされない。アメリカの革命家がアジアやラテン・アメリカから公式やスローガンを機械的に借用している限りは、彼等は第三世界に危険きわまりない害を加えるものである。第三世界が必要としているものは、アメリカでの革命であり、事変の過程に影響を与えることのできない孤立した諸セクトではない。アメリカの革命を推進することが国際主義的活動、国外の抑圧された人々との連帯の最高度の活動になるだろう。それは問題をアメリカにとつてはユニークに取り扱う展望と運動を獲得するだろう。我々はアメリカの社会問題への密着する、革命的なアプローチを必要とする。アメリカで革命家である者は誰でも、アメリカの世界的位置の効力により必然的に国際主義者である。それ故、私がこの国にはらった注目のためのいかなる弁明もする必要がある。

この本の諸章は全体としては不統一に思われるにちがいない。諸章を基本的に統一するものは、人間の最も空想的な解放の夢が今や余儀なき必要物となっている、という観点である。すべての章は、血の何千年の後、位階制社会がその発展の絶頂に到達している、という展望から書かれている。そこから所有の形態、階級、国家、支配のあらゆる文化的道具類が出現する貧窮の問題は、今や貧

窮—後社会によって解決され得る。貧窮が除去され得る点に到達すれば、我々は、貧窮—後社会が単に望ましく、可能性があるだけではなく、もし社会が残存すべきであるならば、完全に必要である、ということを見出す。自由のための物質的前提条件のまさにその発展が自由の実現を社会的必然たらしめる。

もし人類が自然と平衡をとって生きるべきならば、未来社会がいかに組織されるべきか、という基本的ガイドラインのために生態の方に顔を向けねばならない。再び、我々は、望ましいものがまた必要なのであることを見る。非抑圧的、自発的自己表現のための人間の欲望、豊富な経験と境遇のための人間の欲望、人間の規模に揚げられた環境のための人間の欲望は、また自然の均衡を達成するよう実現されねばならない。古い社会の生態的問題は、このように、新しい社会を形づくるだろう方法を明らかにする。これらのすべてのプロセスが生活の完全に新しい方法に向けて一点集中しつつあるという直観は、その最も強い確証を青年の文化に見している。両親の貧窮精神病を大部分免かれていたところの生れつつある世代は、前方に横たわる発展を予期している。種族生活から感覚的であることとの徹底的肯定にまで拡がる青年の見解と実践に、人は未来のユーロピアをさし示す文化的予兆を見る。

私は私の議論のほとんどを現代の社会的発展で新しいものに関して当てなければならない。古いものを完全に無視するわけではない。搾取、人種主義、所有、階級闘争、帝国主義はなお我々と伴にある—そして多くの点で、それらは社会への束縛を深めている。これらの間家庭の青年が白人の中産階級の同輩の文化に増々感応している、ということ、工場が革命的観念に無感覚ではないことの最も希望的なサインの一つである。一度根が付けば、工業技術の発展と同じく文化の発展も、今までもっと広く拡散する—なかならず、心が境遇と年齢によって固められていない人々の間で。感覚と精神の自由をもっている青年の文化はそれ自身の固有のアップルをする。高校や小・中学校へのこの文化の拡大は今日世界中で最も破壊的な社会現象の一つである。

この本の諸章は前述の諸ページで生れた観念を注意深く緻密化したものである。諸章は自由、環境、性の役割、生活様式等の問題への新たな強調を表明する。そして、諸章は現在の社会秩序に対して幅広いユーロピア的代替物を前進させる。私は確信しているが、これらの強調はアメリカでの革命プロジェクトの発展には絶対に必要不可欠である。

ほとんどの章は一九六五年から一九六八年に至る間に書かれた。それはカレンダーではたった二、三年前であるが、イデオロギー的にはずっと以前のことである。ヒッピー運動は、『生態と革命的思想』が出版された時、ニューヨークでちょうど動き出そうとしていた。そして一九六九年六月のSDS（民主社会のための学生運動）の悲惨な大会は、『マルクス主義者よ、聞け！』が完成された時には、未だ開かれてはいなかった。ほとんどの章は雑誌『アナルコス』で、また『アナルコス』のパンフレットとして出版された。二、三はアンガラ新聞や「新左翼」の集合誌で出版された。いくつかの節の削除や添加を除けば、私のほとんどの変化は文体上のものである。『自由の形態』の一章は、労働者評議会への私の観点についての

題は、完全に解決されるまでは、革命的理論や実践では決して衰微し得ない。他の人々が徹底的には論じてこなかったこれらの問題に、私が貢献できることは、しかし、少ししかない。私のユーロピアの強調を正当化するものは、我々の時代の潜在力についての論題のほぼ全欠如である。もしこのわずかに開拓された領域を拡大するいかなる努力もなされないならば、ラジカルな運動の伝統的な問題でさえも、我々には誤った様相—伝統的なものとしての様相—を呈するだろう。このことは慣れた親しんだものとしての我々の非常な一致をねじ曲げるだろう。搾取によって生れた問題は疎外の問題で置換されないけれども、前者の展開は後者の展開によって深く影響される。

これが意味するものの例に顔を向けよう。伝統的な労働運動は決して再現しないだろう。序列や等級への反抗はあるにもかかわらず、「パン」の問題は、ブルジョアの労働組合主義にしばしばあまりにも十分に包摂されているので、古い社会主義型の労働組合の基礎を形成することができない。しかし、労働者は生活と労働の質を変化するために—結局には労働者の生産管理のために—闘うラジカルな組織を今でも形成できる。労働者は、青年が今日感じている存るものと存り得べきものとの間の同じ緊張を彼等が感じるまでは、ラジカルな組織を形成しないだろう。彼等は自身の価値観—単に工場に関するものだけではなく、生活に関する価値観も—の重大な変化をなし遂げねばならない、と私は思う。生活の問題が工場の問題に優越するときのみ、工場の問題は生活の問題に同化されるだろう。その時経済的打撃は或日社会的打撃になり、ブルジョア社会に対する重い一撃を加えて絶頂に達するかも知れない。労働者階級の

いかなる誤解をも除去するために実質的に書き改められた。これらの形態（『労働者評議会』が革命後の時期に経済を引継ぎ、運営する必要があるということ、私が長年抱いていた観点である—勿論、評議会（私は「工場委員会」という用語を使う）が労働者集会によって完全にコントロールされるという条件付ではあるが。もともとこの章は労働者評議会についての議論を、政治を形成する機構としての評議会の欠点についての批評に限定されていた。『自由の形態』の部分の書き変えで、私はこれら評議会の機能を政治を形成する機関から管理機関として区別しようと試みてきた。

ジョセフ・ウェーバーとアラン・ホッフマンへのこの本の献呈は私の最も親しい同志の二人への感傷的なジェスチャー以上のものである。一九五八年に五八才で死んだドイツ人革命家ジョセフ・ウェーバーは、二〇年以上も前にこの本で展開されているユーロピア的プロジェクトの概略を公式化していた。さらに、彼は前レーニン主義時代のドイツ社会主義の偉大な知的伝統において、力強く且リバタリアン的であったすべてのものとの生ける連鎖であった。今年二八才でのトラック事故のためのアラン・ホッフマンの死は、カリフォルニアでのコミュニケーション運動にとっては回復できない損失であるが、その彼から私は反文化と青年の反逆によって捜し求められた全体性という一層広い意識を獲得した。

私は『アナルコス』グループの兄弟姉妹に真の人間関係の暖かさについては勿論、観念の絶えざる交雑について、多くのものを負っている。或る意味で、この本で価値あるものは、私がニューヨークのロウワー・イースト・サイドで、アルタネイトUで、国中のグル

イブやコレクティブで、知った人々の洞察から引き出されている。

の明確な表現を求め、最近の出来事や社会問題に文を注ぎ出すのである。

おてママで博覧会「博覧会」の「マレイ・ブクタン」のイブの表現

「まふ」で「マレイ」の「ハ、ニューヨーク」出陣を「ハ、二」

の「本」開会式で「おの」の「一九七〇年八月一十月」で「ハ、二」

のロで「ハ、二」の「一九七〇年八月一十月」で「ハ、二」

の「本」開会式で「おの」の「一九七〇年八月一十月」で「ハ、二」

の「本」開会式で「おの」の「一九七〇年八月一十月」で「ハ、二」

の「本」開会式で「おの」の「一九七〇年八月一十月」で「ハ、二」

の「本」開会式で「おの」の「一九七〇年八月一十月」で「ハ、二」